

# めん用 秋まき小麦「きたほなみ」の育て方

## 適切な播種の時期・量と窒素施肥法

平成18年に新品種となった「きたほなみ」は、主流品種である「ホクシン」に比べて収量が2割程度多く、めん適性が優れているため、今後「ホクシン」に代わり広く栽培される可能性が高い品種です。しかし、品質の一項目である子実タンパク質が評価基準値（9.7%～11.3%）を下回る場合が多く、適切な栽培管理が必要です。

出穂後の草姿



### 1. 子実タンパク質を基準値内にするための窒素施肥法

「きたほなみ」の子実タンパク質を基準値内（9.7%～11.3%）に収めるためには、「ホクシン」より窒素施肥量を4kg/10a多く施用する必要があります。追肥時期は止葉期（5月下旬頃）が有効です。

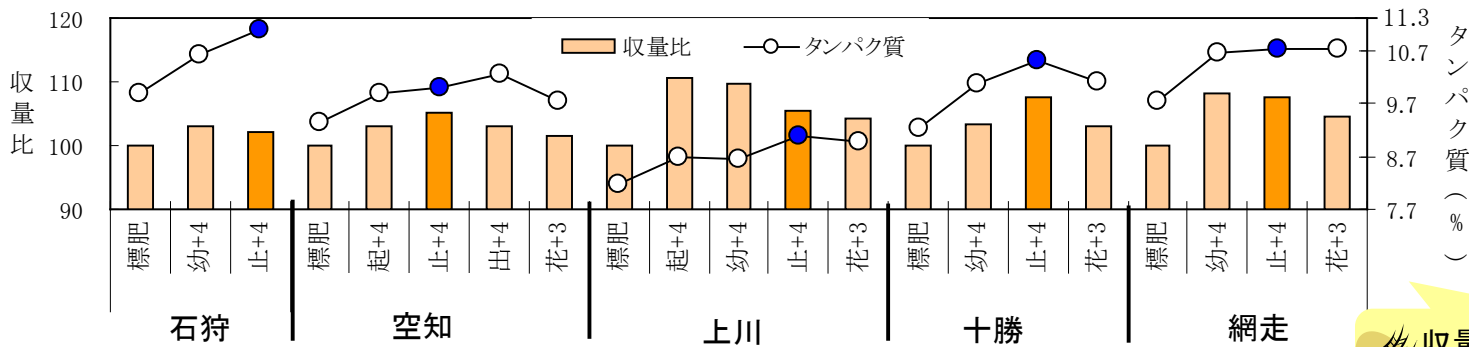


図1 追肥時期が収量・子実タンパク質に及ぼす影響（2005、2006年播種）

注）標肥は窒素を基肥に3～5.6kg/10a、起生期に2～8kg/10a施肥した（「ホクシン」の標準的な窒素施肥法）。起+4、幼+4、止+4、出+4、花+3はそれぞれ起生期、幼形期、止葉期、出穂期、開花後（葉面散布）に窒素を3または4kg/10a追肥した。

収量と適正なタンパクのバランスが重要！

### 2. 適切な播種期と播種量による倒伏防止と越冬性確保

早播きや播種量が多いと、茎数が多く推し穂数が多くなり、倒伏の危険性が増します。このような状態では窒素施肥法による子実タンパク質制御が困難となります。

一方、遅播きは越冬性が劣り、収量性が不安定となり減収します。また、雪腐病の被害を受けやすくなります。

これらを防止するためには、適期に適量を播種することが重要です。

700本以下で倒伏防止！

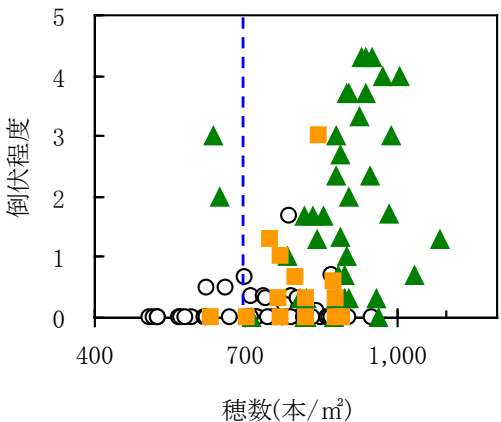


図2 穂数と倒伏の関係（道央・道北）

表 「きたほなみ」の栽培体系

項目	道央・道北	道東
播種適期	越冬前の主茎葉数が5.5～6.5葉となる積算気温520～640℃を確保する期間(7～8日間)	越冬前の主茎葉数が5葉となる積算気温470℃を確保する日を中心とした5日間程度
	各地域の過去の日平均気温データより求める。	
	概ね9月12～22日頃	概ね9月19～28日頃
播種量	170粒/m <sup>2</sup> (ただし、積雪期間が長く、かつ干ばつ害を受けやすい地帯では、穂数を確保するため255粒/m <sup>2</sup> を上限として増やす)	200粒/m <sup>2</sup> (ただし、播種適期を超えて遅播きとなる場合は255粒/m <sup>2</sup> を上限として増やす)
窒素施肥法	(基肥—起生期—幼形期—止葉期、各kg/10a)	
	4—6—0—4	4—A—0—4 (Aは土壌診断で決定)
	1. 総窒素施肥量は、「ホクシン」より4kg/10a程度増肥する。 2. Aの追肥量が多い場合は幼穂形成期に分肥する。 3. 収量水準が高く、あるいは養分吸収が阻害される圃場で、低タンパク(9.7%未満)が懸念される場合は、上記施用に加えて開花後(もしくは幼穂形成期)に追肥を行う。 4. 「ホクシン」で高タンパク(11.3%超)となるような圃場では止葉期は無追肥もしくは追肥量を減じる。	
病虫害防除および収穫	「ホクシン」に準ずる。 (「ホクシン」と比較して成熟期が2日程度遅い。)	
品質	良質小麦生産のために適期播種に努める。 (早播や晩播は、小麦粉の色などの品質を低下させることもある。)	